浮世絵に見る飛鳥山

右側の絵は、「古今東京名所 飛鳥山公園地王子製紙会社」です。歌川広重（三代）により明治 16（1883）年に制作されたものです。三代歌川広重は、幕末に活躍した絵師・歌川広重の門下です。

この作品は、江戸時代の様子を描いたものと明治時代の様子を描いたものとで対になっています。どちらも同じ場所です。上の絵は、江戸時代の人々が飛鳥山の崖上から「かわらけ投げ」を楽しむ様子が描かれています。かわらけ投げは、厄よけなどの願いを掛けて、素焼きや日干しの土器の酒杯や皿を高い場所から投げる遊びです。高台にある花見の名所などでよく行われていました。

一方、二番目の絵は、明治となり、洋装の紳士やコウモリ傘をさす男性が崖下の煉瓦の工場を眺め見る情景が描かれています。文明開化の時代には、花見と共に、煙突から煙を吐き出す煉瓦の工場が新名所になっていたのです。

この工場こそが、明治時代の実業家である渋沢栄一の呼びかけで、明治 8（1875）年に日本初の製紙工場として操業を開始した「抄紙会社」（後の王子製紙）です。工場は、三棟の総煉瓦造りの建築物でした。当時の東京には、本格的な西洋建築はまだほとんどなかったので、西洋風の工場と、煙突からのぼる煙は、まさに文明開化の象徴として人々の目に映ったことでしょう。

明治 16（1883）年には、飛鳥山の崖下に上野～熊谷間を走る鉄道が開通しました。現在、飛鳥山の崖際から東側（低地側）を臨むと、明治時代の人々が眺めた煉瓦の工場に代わって、ＪＲ京浜東北線・高崎線・新幹線の高架とタワーマンションのある景色が広がっています。

上下ともに飛鳥山博物館所蔵

現在の飛鳥山からの眺望

【次号から、近代日本医学の父・北里柴三郎を紹介します】

今から 130 年前、伝染病との闘いに挑み、多くの人々の命を救った北里柴三郎。彼は、前号まで 1 年半に渡って紹介してきた渋沢栄一と同じく、2024 年からの新紙幣（千円札）の肖像に選定された人物です。

2019 年より、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大が続いています。伝染病の制圧に多大な貢献をなした北里の生き方を、学校法人北里研究所北里柴三郎記念室をはじめ、関係大学・研究機関に御協力をいただきながら、調べていきたいと思います。引き続きお読みいただければ幸いです。

ドイツ留学中の北里柴三郎【提供：学校法人北里研究所】